

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2001年3月23日 - 4月5日)

鳴門市北灘中学校 教諭 森 義 雄

3月23日 (金)

直前研修【17時～19時】：新大阪コロナホテル

全体説明の後、各地区代表の先生方から自己紹介と抱負があり、今回のプロジェクトにおける意気込みを感じた。米日財団からは、「目に見える成果が欲しい。今回の研修で何を持って帰ったか。日本の教育に米国の教育をどのように盛り込んだか。」という話があったと聞き、気を引き締めて本研修にあたる心構えができた。

今回のFlat Rock Middle Schoolの訪問時に姉妹校締結の段取りを運ぶことを一つの目的としており、そのための確認で地元教育委員会に事前に書類の提出が必要な場合があることを知った。直前研修の後、本校の校長先生に確認の連絡をとり、Flat Rock Middle Schoolで姉妹校締結の話をすすめることになった。

3月24日 (土)

直前研修【10時～12時】：新大阪コロナホテル

関空【16時25分発】からノースカロライナ州へ移動

直前研修の中で、ジャーナルキーピングの必要性やクラスの観察時には、生徒人数、指導者氏名、授業の様子などを詳しく記録しておくように指示があった。また、学校全体の観察、地域社会の観察、教員とのインタビュー記録をとり、ビデオ撮影では校長先生とクラス担任の先生の両方の許可をもらうことなどを教えていただいた。姉妹校を結んだ学校からは、交流方法として相手校に送る作品をつくり、デジタルカメラで撮影して送っていることなどの例も示された。また、ノースカロライナ州では、教員免許は5年間の期限があることや教育政策は州に任せられていること、主な都市の人口や学校の1年間で6学期制で学期の終わりに休みがあって、夏休みは6月～8月であることやスクールバスでの登下校、授業間の休憩と移動は5分間であること、職員室がないことなどを知った。日本の教育との違いを事前に聞くことができ、たいへん勉強になった。

関空からノースウエスト航空70便に乗り、デトロイ

トまで12時間余りの時間を過ごした。デトロイト空港では、日本の空港とは違う雰囲気があり、多くの人が日常一般的に飛行機を利用しているように思えた。日本の新幹線の利用と同じ感覚で乗っているのだろうか。初めての渡米に気持ちも高ぶり、見るものすべてが目新しく映っていた。日本の昼間に出発をして、14時間の時差を越えたこともあり、少し眠気もあった。しかし、今回の研修に参加されている先生方が、公衆電話のかけ方に挑戦をしており、シャーロット行きの飛行機の待ち時間が過ぎるのが早く感じられた。

シャーロットへは、小型ジェット機でおよそ1時間40分余りの移動をした。

Mr. Lois先生、Mr. Casey先生、小野先生の出迎いで、初めてのアメリカの車での移動がスムーズにいった。このとき、空港のチェックアウトを済ませると周囲は少し暗くなっており、Ashevilleまでの途中、食事に寄り、そのボリュームの多さに驚いた。アメリカのハイウェイは道幅が広く、交通渋滞がなかったことが、うれしかった。長距離の運転をされた先生方に感謝をしたい。

WCUのMadison Hallに到着したとき、ホームステイ先のMs. Anne先生が車で迎えに来てくださっており、自宅へ向かうことになった。登りや下りのある道を行ったところに自宅があり、初めてのホームステイで私の英語力のなさがプレッシャーとなって重くのしかかってきた。しかし、Ms. Anne先生がたいへん優しく、身のまわりのことにも気を配ってくださり、高木先生が、通訳をしてくださったので家の案内などについても理解できた。

3月25日 (日)

ホームステイ：Anne先生宅

歓迎レセプション【18時～】

朝、6時過ぎに目が覚める。しばらくすると、小鳥のさえずりが聞こえ、ふと窓の外に目を向けると、そこは自然に恵まれた山々があり、雄大な景色が広がっていた。しかし、小鳥の姿を見つけることができず9

時頃まで横になっていた。朝食は、パン風のビスケットにスクランブルエッグ、コーヒー、オレンジジュースと私の口に合うものばかりで、ゆっくりと味わいながら食べることができた。昨年度、鳴門第一高等学校の稲井先生がホームステイをされたそうで、そのとき、日本から持ってきた味噌汁を作ったときのお話を聞いた。Ms. Anne 先生は、日本の文化に興味をもっておられ、鳴門市第一小学校へ来校したときの写真や日本の庭園の写真を大事にアルバムにされていた。私は、今回の研修の最初からすばらしい人たちに出会えたことで、これからの日程を希望を持ってこなしていくこととなった。朝食の後、Ms. Anne 先生の部屋のパソコンから北灘中学校にEメールを英語で打って連絡をとるようにした。しかし、Eメールをいつ送るか、時間帯を連絡しておかなかったために、ホームステイが終わった後でメールが届いたそうで残念だった。この後、CULLOWHEE VALLEY SCHOOLに訪問をさせていただき、玄関に大きな五月人形が飾られていたことに感激した。学校上げての国際交流を目指している姿勢が見られ、Ms. Anne 先生のクラスにも日本の学校の様子を撮影した写真があるなど、積極的に日本を理解しようとしていることに心を打たれました。

WCUのMadison Hallでの阿波踊りの練習を1時間ぐらいして、Harrel Center Auditoriumに移動しての歓迎レセプションが18時から始まった。レセプションに参加されている米国の方たちは、誰もが快く迎えてくださり、声もかけてきてくれたのでうれしかった。しかし、阿波踊りのトップに立って踊ったときは、最初は恥ずかしく、はりきりすぎたこともあり、たいへん疲れたことを今でも覚えている。米国の子供達が踊っていたステップダンスは、同じパターンで踊っていて簡単に思えたが、いざ、教えてもらおうと複雑なステップであることがわかり、四苦八苦しした。しかし、女の子がやさしく丁寧に教えてくれたこともあり、たいへん上手になったような気がしたのは、気のせいだろうか。また、Flat Rock Middle SchoolのMs. Lisa先生とご主人さんにも会うことができ、ほっと一息をつくことができた。長いようで短い歓迎レセプションでしたが、この日のことが、これからの12日間のよい滑り出しとなった。

3月26日(月)

ホームステイ (Ms. Anne先生宅) 先を出発

Fairview Elementary SchoolとSmoky Mountain High Schoolの訪問

Hendersonville地区のWAVERLY INNに宿泊

早朝、Ms. Anne先生が、Madison Hallまで送ってくれた。大学の食堂 (Brown Cafeteria) で、他のメンバーといっしょに朝食を食べた。料理は甘いか、辛いかという味付けのものがほとんどで、初めてのメニューもあり困った。しかし、全員がそろって食べる食事の味は格別だった。あと何回か来て、どんな味の料理があるか知れば、きっとメニューの取り合わせもしっかりとできると思う。

食事が終わった後、アート展(youTH ART MONTH)とその表彰に参加した。小学校の子供たちが製作した絵や置き物が展示されており、親子づれで表彰式に参加している。たくさんの表彰があり、そのときの子供の笑顔がすばらしかった。この後、車にスーツケースなどを積み込み、全員でFairview Elementary Schoolに移動した。

Fairview Elementary Schoolの周囲は自然に囲まれており静かである。たくさんのスクールバスが駐車場にあった。校舎は平屋建てであり、上空から見ると円形で、その中心にメディアセンターがある。また、庭には花壇やワイルドウォッチのための野外施設もある。

校長先生 (Ms. Sue Nations) が、案内と説明をしてくれた。玄関を入ると円形のフロアーが広がっており、3年生75名の歓迎を受けた。最初、手話による歌の後、私たち一人一人に一輪の花を贈ってくれた。これには、たいへん感動した。この後、フロアーで副校長先生からの説明があり、学校の案内、各自が各クラスに行って一人ずつの先生と組んでの参観をする、12時にメディアセンターで食事をしながら質問をするという順番で行うことが示された。

Fairview Elementary Schoolは、4歳の幼稚園児から、中学校2年生(第8学年)までの783名が登校しており、ほとんどの教室が円形で、壁の仕切りがない。先生方は、この部屋を「豆のさや」と言っている。各先生が自分の部屋を持っており、教室の間は高い本棚がある。各学年4クラスぐらいあり、1クラス17名~25名の子供が授業を受けている。幼稚園から3年生までは1クラスごとにサブの先生がついている。木曜日

の晩の夜6時～8時には、生活発表会のカリキュラムフェアがあり、保護者の方が来校する。このカリキュラムフェアの準備として、生徒は自分たちが取り組んでいるプロジェクトを完成させたり、作品を仕上げているので普段の授業とは違っていた。子供達に「書くこと」を重点的に取り組ませていた。また、Fairview Elementary Schoolは、ウェスタンカロライナ大学の付属小学校で協力校になっているため、児童は多くの先生の訪問に慣れている。

玄関ホールの奥には、幼稚園があった。あとからできたようで少し狭い部屋となっており、1つのテーブルに5人ぐらいずつ座って、塗り絵などをしていた。各テーブルには、先生がついており、個別指導をしながら子供に学習をさせているようである。また、絵を描いたり木工などの工作をする部屋もあるそうである。しきりの反対側のテーブルでは子供達が食事をしており、行儀が良いところも好感が持てた。

次に2年生3クラス、1年生2クラスの部屋に移動すると、Readingの授業は、完全個別化しており、教科書を使用せずに文学教材を用いていた。上級学年まで、この方法で行っているそうである。数学は、物を使うことから始まり、次第に紙と鉛筆を使っている。社会と理科は、数学や読み書きの中に統合されている。

4年生の児童はパワーポイントを使っており、そのためのコンピュータは多くあり、1台を1人か2人で使用していた。スキャナー、デジタルカメラ、デジタルビデオもあり、先生方は、コンピュータソフトや器具の使い方のトレーニングをそのつど受けている。他のグループは、2人で船の模型を工作したり、6人のグループで絵を描いている。また、部屋には動物の写真が掲示してあった。

生徒を矯正する部屋があり、ガイダンスカウンセラーが低学年に1人、高学年に1人、ソーシャルワーカー(困ったことのある子供を見つけて、それにあったサービスをする。)が全体に1人いる。また、進路の遅れている子供たちを教える先生は3人いる。しかし、こういう特別な教室では、1日に何時間かを過ごし、その他は普通の学級で学ぶそうである。

次の部屋に移動すると2年生2クラス、3年生2クラスが入っており、あるグループは、15人がひとまとまりになっており、一人ずつ発表練習をさせて、他の子供達から質問をさせる方式をとっていた。先生方は

毎日、計画する時間をもったり、1日にあったことをシェアリングする時間をもっている。これは、子供達のために学習を考えるラーニングとして、1つのチームとして大切なことである。

小学校低学年のためのプレイグラウンドがあり、ピクニックエリアも2つある。ここには、プラスチックをリサイクルして作ったテーブルと椅子がある。また、ワイルドウォッチプログラム全体が見える高台があり、そこからは小川が見えた。

== ワイルドウォッチ =====

ワイルドウォッチとは、先生と子供達がいっしょに活動する野外の環境教育実験場のようなものである。看板には、Natural Sciences Nature Neighborhoodと書かれていた。トレイルという子供達の歩く道が整備されていて、途中に虫を飼っている所や野生の花のエリア、池、自然の滝のようなものがある。高台があり、その下には、小さい動物が入ってこれないネットがある。子供達が座るベンチもあり、バードウォッチングができるようにしてある。移動することは、体育のフィットネスの運動にもなるそうである。

私が、高台に行った時には、3年生が活動していた。彼らは実際にいろいろなものを見ることで、自然に関する詩を作っていた。これは、環境と理科と国語を統合したものである。カリキュラムフェアのテーマがwritingとreadingなので、それとドッキングさせるための活動である。

7年生と8年生はグローブというプログラムに参加していて、酸性雨やpHを調べ、データをコンピュータでアメリカ農務省が管轄しているところに送っている。こういうプログラム全体をグローブと呼んでいる。これに参加している日本の学校もあるそうである。

=====

他の場所には、花壇があり蝶々が来る庭となっている。グラウンドを柔らかくして子供達がバスケットをしたり、フィットネス施設もある。また、キャンパスのいろいろなところに子供達が学べるものを準備している。現在、使用されていないトレーラーハウスがあったが、これは、アメリカの学校で子供達の人数が急に増えたときに使っていたそうである。

次に別の部屋に移動すると、入り口には「EX-

CELLENCE starts with you!』という垂れ幕があり、数学と地理を応用して、プロジェクトに関係している人たちの場所と距離を調べるためにコンピュータを使っている生徒がいた。すぐそばには、指導教師がついており、個別指導をしている。他のグループは数学の授業を一齐に行っており、積み木のようなものを使っていた。一齐授業の中に個別指導を入れているようすもよくわかる。

体育館ではコーチが2人いて、大学からインターンとして2人が来て実習をしていた。他の先生もたくさん参加していた。保護者が来てフィジカルフィットネスのプログラムをすることもある。この学校は、アメリカの教育省から認定された研究指定校となっており、幼稚園から8学年まで持っている学校では、体育の研究指定校となっているのは、アメリカではただ1つである。

このとき、6年生はアラバマにあるNASAのトレーニングキャンプにスペースキャンプをするため出かけていたので授業参観はできなかった。メディアセンターは、図書館とメディアをいっしょにしたもので、教師用の専門的な雑誌類があったり、子供が自分の作品をループでバインドし、表紙をつけて製本できるようにしている。書棚は、『FICTION』、『NORTH CAROLINA COLLECTION』などのコーナーがあった。

この後、全員が各教室に分かれて、そこで授業参観をした。私は、理科で環境の発表をしている7年生のクラス（指導教師：Ms. Marianna kesgen先生）のところに行った。17名の生徒がいて、全員が自分で調べたり、実験したり、聞き取り調査したことをまとめてパネルにしていた。これを1人ずつ発表して、その内容についてクラスの生徒から質問を受けたり、先生が質問や指導をするなどしていた。多くのパネルは写真とワープロの文字で構成されており、たいへんわかりやすい。オゾンについて調べている生徒は、その題名を『CAUSE OF OZONE AND EFFECTS』としていた。発表の中で印象に残っているのは、公害のもとになる汚染物質が他の地域からもやってきて、森林の破壊がすすんできていることを実態調査で調べたことや、工場からの煙が近くの自然を破壊していることを聞き取り調査に行ったときに指摘すると、工場で働いている人と口論になりかけたこと、自動車のマフラーから出る排気ガスを調べるために布をマフラーに直接あて

て色の変化（黒くなっていた）を車種ごとに実験していたことなど、その取り組みはすばらしく説得力があった。

12時ぐらいにメディアセンターで、Fairview Elementary Schoolの先生方と食事をとった。私たちをもてなすために各テーブルに分かれて話し合いの機会をもうけてくださった。

次にSmoky Mountain High Schoolに移動した。玄関ホールではMr. Kenneth Nicholson校長先生が迎えてくれた。1960年に建てられた建物であり、現在、学生は929名いて、男女の比率は半分ずつとなっている。マイノリティはアメリカンインディアンの人たちである。90%は白人であり、8~9%がアメリカンインディアン、あとはヒスパニックグループに属している。教職員数は72人で、全部で105人のスタッフがいる。60%の学生は自分で車を運転して学校へ来ており、他の40%はスクールバスで登校している。最高学年の駐車場は校舎のすぐ近くで、他の学年は、少し離れた所に駐車している。チームの名前は、『MUSTANGS』であり、玄関横の壁には白馬の絵とともにこの文字が書かれていた。Smoky Mountain High Schoolは、シルバーとウェブスターという2つの高校を1つにしたもので、1988年に統合した。カフェテリアでの食事の時間は3つの班に分かれており、食堂内の各場所へ行ってピザ、ハンバーガーなど好きなものを食べることができる。IDカードをもって、直接、お金を払わずにカードで精算をする。

キャリアインフォメーションセンターでは、将来どんな方向に進学したいか、学生がコンピュータを使って問い合わせをすることができる。キャリアカウンセラーは、3人いる。卒業証書の内容は3種類あって、①キャリア（職業につく）、②キャリアカレッジ（2年制のコミュニティ大学）、③4年制の大学へ進学する方向で終える となっており、これによって将来の進路が決まってくる。学習障害のある学生は、1~2%いる。6月には学生が持つカタログを配布される。この内容は、どんな授業があって、どういう卒業証書をもろうコースに入り、どういう授業をとるか書いてある。4年間にどういうふうに授業をとるかは自分で考えていく。これは、大学の履修手引きのようなものである。また、高校に在籍しながら離れたところにあるコミュニティカレッジやウエスタンカロライナ大学の授業の

単位にできる。こうすることで大学に進学したとき、単位として数えられ、その授業をスキップできる。最終学年になるとコミュニティカレッジやウエスタンカロライナ大学へ行って授業を受けることで単位をとることもできる。

ジュニアカウンセリングルームのコンピュータは、LANでつないでおり、授業では自由に使えるようにしている。美術室へ移動するとミュージカルのステージで使う大道具を作っていた。それぞれの先生の部屋には電話があり、連絡をとることができる。生徒が授業中にヘッドホーンをすることを認めていないが、美術の時間などで特別に認める場合もある。

次に生物の授業を参観した。そこでは、大学レベルの授業がされており、体の中の血液の循環がどのようになっているか。寝ているときや起きて活動しているときに、どのように血圧や心拍数が変化するか温度の影響も考えて調べていた。授業が終わったら簡単なテスト(10問)に答えたり、レポート(どういう目的で、何を測定して、どういう基準で実験をしたのか、また、どのように変化したかを科学的データとして出したもの)を提出することになっている。この授業を受けるには、インダストリーのバイオレンスとケミストリーを受講して良いスコアをとっていることが最低条件となっており、授業の先生の推薦も必要である。5月に授業が終わるときにナショナルイグザムスがあり、それに合格すれば正式に単位として認められる。このことにより、大学1年生の教養科目でとらなければいけない理科の単位は免除される。

職業コースの建物(1975年に建てられた)に移動する。ここでは、テクノロジー、ヘルスケア、チャイルドケア、旅行業の各コースを教えている。将来、新しい校舎が建った時に廊下になる所で作業をしている学生もいた。ソーラーシステムでエネルギーをためて使用しており、学生が建築物を造って、それを売り、そのお金で新しい建物を造るようにしている。電気自動車についても研究されており、平地で100マイルのスピードが出せる設計になっていた。

USヒストリーの授業では、パワーポイントを使用しており、リモートコントロールをしていた。世界史の授業では、スマートボードをパワーポイントと接続しており、ペンで書いて手で消せる機能を使ったり、手書きのものもそのままセーブできる機能も使われて

いる。そのほかに、アイマックのコンピュータで建築物の図面を書いたり、溶接の訓練、ミュージカルの練習、劇の練習など多くの分野での授業を実施していた。

学校訪問のあとCasey先生の車でWAVERLY INNに送ってもらった。レストランの食事は、近森先生、高木先生、Casey先生、Kristy先生と私の5人でとった。味は口に合ったが、時差の影響で食欲がなく、料理の多さに困った。

この後、1日の反省会を持った。その内容は、

- 高等学校のシンボルは、マスコットアニマルを使っている。カーディナルはノースカロライナのシンボルである。
- 小学校では、リーダーはレポーターであり、記録者である。トラベラーがいて、他のグループへ行って提案をすることもある。学習の目的によってリーダーができて育っていく。
- スクールバスの運転は、保護者のボランティアであるが、子供が、親に運転に来ないように言うこともある。
- アメリカでは自分が思っていることを立って言うように言われたり励まされたりする。これは、小学校3年生ぐらいからで、7割ぐらいの生徒がうまくいくが、あとの3割がうまくいかない。Flat Rock Middle Schoolの生徒と比較してみる。
- アメリカの学校の休みは、合計143日ぐらいである。その内訳は、
春…14日、夏…45日、冬…12日、休日…15日
1ヶ月6日×9ヶ月=54日
- 盗みをした生徒が警察に保護されると、学校から謝りに行く。
などである。

3月27日(火)

Flat Rock Middle Schoolを訪問(一日目)、歓迎会
北灘中学校の紹介(ビデオ)、質問・意見交換

朝、WAVERLY INNの朝食を食べた。メニューの詳しい内容がわからずに注文をすると、味の付いていないお粥のようなものが出てきた。好みによって砂糖を入れて食べるようになっている。ご主人は、たいへん丁寧な方で、気をつかってくれた。Ms. Lisa先生が車で迎えに来てくれ、Flat Rock Middle Schoolへ行く。片道10分ぐらいの道のりで、周囲は緑に囲まれゆっ

くりとした時間が過ぎているように思われました。小高い丘の上に平屋建ての中学校があり、生徒はスクールバスや保護者の車で登校をしていた。路線バスは通っていないようで、交通事情が日本と違うことに驚き、不便さも感じた。スクールバスで登校した生徒は、一度、体育館に入り、点呼をした後で移動する。そのとき、朝食を学校の食堂で食べている生徒が多くいたことを覚えている。日本の学校ではないことだと思うが、必要であれば、これから取り入れなくてはいけなくなるかもしれない。近森先生と私（森）はMs. Lisa先生の案内で、玄関横（教師と生徒の出入り口はいっしょになっている）の事務所を通り、校長室へ案内された。Ms. Barker 校長先生と対面して歓迎の言葉を受けた後、4日間の日程表を手渡された。

Ms. Lisa先生の教室へ行く。空調設備が整っているようで教室には、窓がなかった。椅子が机と一体となっており、コの字型に並べてあった。壁には、布で日の丸の旗を作って貼ってあり、Ms. Lisa先生の机には、折り紙や習字の作品など、北灘中学校に来られたときのものや松浦先生がプレゼントとして持ってきたものがあり、大切にしてくださっていることがよくわかった。

8時20分～8時50分の間、音楽の担当である Ms. Poole 先生と子供たちが、私たちのためにオーケストラバンドによる歓迎の演奏を準備してくれていた。この日のために多くの時間をかけて練習をしたと思う。6th Grade Band (58名) による演奏は、①SAKURA SAKURA、②CAMPTOWN RACES、③ON TOP OF OLD SMOKEY (この地域の民謡で失恋の歌)、④OLD MACDONALD HAD A BAND、⑤WHEN THE SAINTS GO MARCHING IN、⑥HARD ROCK BLUES、⑦THE RED, THE WHITE AND THE BLUES (アメリカの星条旗) と続いた。日本の歌「さくらさくら」の演奏が始まったときには、その音色のなつかしさに聞き入っていた。バンド演奏の後、子供のピアノ演奏に合わせて、近森先生と2人で「さくらさくら」の合唱をさせてもらい、言葉の意味について近森先生にわかりやすく説明をしていただいた。1曲終わるごとに子供から歓迎の言葉とプレゼントを贈られた。

この後、8時50分～9時44分は、私が北灘中学校を中心に紹介したビデオの視聴をしてもらい、質問を受

ける時間を持った。生徒は長時間のビデオ視聴に我慢ができていない。ビデオの中の琴の演奏を、エキゾチックに思っている。

生徒からの質問内容は、次のとおりであった。

- 兵庫県南部地震についてどうだったか。
- 日本で危ない動物は何か。
- 自動販売機で何が買えるか。
- 空手部はあるか。
- 北灘中学校では、琴の他に何を演奏するのか。
- 禅について。
- 中学校の給食で子供は何が好きか。
- 「中学校」の発音方法は。
- 家にペットを飼っているか。
- どんなおかずが好きか。
- アメリカであるもので日本にあるものは何か。

この後、11時まで校舎内の案内を受けた。最初なので、東西南北がはっきりとわからない。11時～11時30分は、cafeteriaで昼食をした。メニューはたくさんある。自分で組合せを考えて食事をするようになっていく。味について聞くと生徒達は、いっしょうけんめいに説明してくれた。味は口に合うし、ピザなどもあり、楽しい昼食を毎日できた。

11時51分～12時36分は、7th Grade Band 27名によるバンド演奏があり、ビデオの視聴の後、質問を受けた。ビデオの視聴の時に Ms. Poole 先生が補足の説明をしてくれた。姿勢の良くない生徒が1人いて注意をしていた。しつけはよく、ビデオの視聴は静かであった。

生徒からの質問内容は、次のとおりであった。

- 学校にサッカーチームはあるか。
- 教師として何年勤めているか。
- 長さの単位は何を使っているか。
- ビテカントロプスについて
- エルビスプレスリーなどを知っているか。
- 1\$は日本円でいくらか。

12時39分～13時24分は、7th Grade Band の別クラス28名（男子11名、女子17名）によるバンド演奏があり、ビデオの視聴の後、質問を受けた。姿勢はたいへんよく、集中してビデオの視聴をしている。

生徒からの質問内容は、次のとおりであった。

- アメリカの食事は好きか。
- 奥さんはいるのか。
- アメリカの歌で好きな曲は何か。

- スポーツは何が好きか。
- 日本だけのスポーツは何か。
- 泳ぐのは好きか。
- スキューバダイビングの経験はあるか。
- 朝、何時に学校へ行くか。

14時15分～15時は校舎内の様子を見学した。15時～15時20分は、bus dutyで体育館に子供を集めて順番にスクールバスに乗せていた。教師が交代でこの役をしている。

夜、1日の反省会をもった。その内容は、

- トレーラーハウスのことについて
- 学校の教育では、エイズ、ドラッグについては教えているが、避妊についてはしていない。
- 日本の教育は形から入るが、アメリカはあまり形から入らない。
- アカデミッククラスについて、IQで分けている。
- スペシャルクラス、ジェンダフリー、ボランティアについて

3月28日（水）

Flat Rock Middle Schoolを訪問（二日目）

藍染めによるハンカチの染色

今日は、藍染めを授業で行う日となっている。美術のMr. Mckay先生に会ってからすぐに授業に入った。先生からは、6年生から8年生までの違いについて見て欲しいという依頼もあった。

8時10分～9時45分は、6th Grade Bandの藍染めの授業で、染色の説明を近森先生に英語ですべてしていただいた。生徒は説明をよく聞いており、積極的に作業をして早く終わることができた。染色作業では布を染色液から出すとき、他の子が手伝うなど協力をしている。皆、たいへん仲が良く授業の雰囲気も良い。布についての余分な染料を洗うが十分に落としていない生徒もいたので手伝うようにした。染色の後、生徒から質問があった。

- 北灘町でも3kで他の職業に移るか。
- 北灘町で漁に就いている人は何割か。

子供から、自分たちの名前を漢字になおして欲しいという要望があり、近森先生と名前の変換をした。漢字に意味があるので意外と難しい。変換した名前には、次のようなものがある。

Maria 真里亜	Crystal 久理州田留
Nicole 尼湖留	Scooter 酢久有田亜
Amanda 亜満田	Eduard 江戸有土

10時から Mr. Mckay 先生に質問をする時間がとれた。おもな質問と答えは次のとおりであった。

Q. 学校のようにすについて

A. 身体に障害をもっている人はいないが、スペシャルクラス（学習障害）は1クラスあり、特別に教師がついている。校舎の外側にあるトレーラーの建物がスペシャルクラスで、英語を第二母国語とする一部の生徒も学んでいる。

ISS（インスクールサンペンジェス）について、学校のルールを破ったり、けんかをしたり、喫煙、先生に対して反抗的、授業や学校に出てこない生徒について、校長先生と副校長先生が特別クラスで学習するかどうかを決定し、一般的には3日間、長くても1週間を越えない範囲で入室させる。このクラスの人数は16人までであり、特別に教師がついている。

Q. 日本ではいじめと不登校が関係している場合もあるが、アメリカではどうか。

A. ハイスクールでは、銃の乱射事件があるが、あれがいじめの結果起こるものだと思う。アメリカの場合は、外に出て、いじめた生徒をやっつけようとする。いじめられて自殺する生徒もいるが、自殺したことは、あまり全米に広がることはない。地方の新聞に出ることはある。自殺する生徒の数は日本より少ないと思う。

Q. 日本では、いじめられて自殺した生徒がいると学校が責められるが、アメリカではどうか。

A. 学校だけが責任のあるものではない。

Q. ガードマンが学校を巡視しているか。

A. していない。

現在では、情報がインターネットでいろいろと入ってきているが、情報がありすぎて子供をスポイルしている。情報が多くて選べなくなってしまっている。

11時51分～12時36分は、7th Grade Band（19名、男子5名・女子14名）の藍染めの授業（指導：近森先生、森）で、染色液にハイドロコックを入れて再度、使用した。7年生ということもあり、染色のための型紙の模様を工夫して作っていた。私が用意した3匹のイル

カの型紙を4～5匹のイルカに増やしたり波を入れたりして応用や工夫をしている。全員の仲は良く、協力的である。時間を有効に使って次々と染色をくり返す姿には感心した。

13時27分～14時12分と14時15分～15時は、8th Grade Band (18名、男子12名・女子7名)の藍染め授業をした。子供の雰囲気は大人に近づいている。最初にMr. McKay先生から紹介があって、近森先生が染色方法の説明をした。このとき、型紙を用いた染色、布の両サイドを輪ゴムでとめて染める方法について、演示をしながら行った。注意点として、手袋をしないと手に染色液がついてしまうことや目には入らないようにすること、服につけないことなどを指示した。授業の前半は、輪ゴムを使用したり、割り箸を使用する生徒ばかりで、私が作った型紙を使う生徒はいない。布を輪ゴムで縛った後、座席の前列から順に染色液の入ったバットに漬けに行っている。特別な指示もなく自分たちで考えて行動をしているようである。型紙を用いて染める生徒が14時25分から出てきた。7分間で4名の生徒が型紙を使いだした。

WAVERLY INNに帰り、1日の反省を持った。そのとき、私からMr. Casey先生に質問をすると次のように答えてくださった。

Q. 生徒の様子(落ち着き、考え方等)は、10年前に比べてどう変わってきているか。

A. たとえば、1人の子が4～5枚のジャケットを忘れてしまい、落とし物として扱われると、親は子供に新しいものを渡す。多くの人、子供の様子が以前と変わってきていると言うが、私はそうは思わない。年代色があるのではないだろうか。日本もアメリカも10年前に比べて変わらないのは、今の親も子供の時に同じように反抗的であったからだろう。

Q. 日本では読み書きそろばん(国語、数学)を中心に受験勉強をすすめることが多いが、アメリカの子供達や保護者の考えはどうでしょうか。

A. 日本では良い高校へ進学をしようとしているが、アメリカでは、生徒が進学する高校が決まっているのでそうではない。たとえば、アメリカの体育の先生も自分が教えていることが、5教科と同じように大切と思っているので、子供達を大切にしている。

また、近森先生が通訳をしてくださり、授業がたいへんスムーズにいていることや、生徒が私の片言の英語を聞き取ろうとしていることをうれしく思うと話をする、Casey先生は、外国人が訪れることはめったにないので、私たち(日本人)が来校していることをたいへん歓迎しているとおっしゃった。

3月29日(木)

Flat Rock Middle Schoolを訪問(三日目)

折り紙の製作

8時11分～8時56分は、6th Grade Band(生徒数20人、担当教師:Ms. Poole先生、指導:近森先生、森)による折り紙(兜と風船)の製作を行った。私が、新聞紙で見本を示しながら日本語で説明をしていく。全員が折り方をしっかりと見ている。アメリカの新聞紙は日本よりも小さく、後でかぶることができるのか不安であった。少し説明に手間取ってしまい、兜はできたが風船づくりは途中となってしまった。生徒が難しいと思っているところは、兜の前立ての三角を作るところであった。兜の実物を持ってきて日本の文化も併せて説明すると教育効果があると考えられる。折り紙をする目的は、日本の文化に触れてもらい、アメリカと日本の共通点と相違点を知ることの一つである。

8時59分～9時44分は、6th Grade Band(別の組、担当教師:Ms. Poole先生、指導:近森先生、森)による折り紙(兜と風船)の製作を行った。今度は、全員が最後まで折ることができた。新聞紙の準備と配布ができていれば、スムーズに行く。兜をかぶる向きを変えている生徒もいた。皆、微笑んでおり、少し満足をした。

10時15分～11時05分は、Ms. Corwn先生の数学の授業を参観させていただいた。全体指導と個別指導をうまくして、生徒の考える力をつけている。OHPを教室の中央に置いて、数学の問題をペン書きし、計算方法などを答えさせていた。このとき、理由を言えるように指示をしている。できれば、誉めることで生徒のやる気を起こさせ、全員に質問できるように努力していた。半数近くの生徒が挙手をしており、指示と答えの引き出し方も速いので授業のすすめかたは速く感じられた。生徒には3枚のプリントを与えており、基本的な計算方法と応用を記入してあった。不等号の問題では、数直線で不等号の確認をしておいてから問題を

解くようにしている。

次に、問題を解かしながら机間巡視をして指示をすることや授業の最後15分間は、個別の課題に取り組むようにしている。このとき、コンピュータや実験器具と計算機を用いて複雑な計算に取り組んでいる生徒が2名いた。

学期末であり、Henderson County Public Schoolの共通テスト問題を解いていた。

ノースカロライナ州の共通テストは、1～4の4段階の評価をしており、4は10%、3は80%、1と2は合わせて10%ぐらいの生徒がいる。1と2をとるとHigh Schoolへ行けないが、何年もHigh Schoolへ行けないことはまれである。

11時51分～12時36分と12時39分～13時24分は7th Grade Bandに折り紙を理科室で指導した。全員が椅子に座れないので、床に座って折り紙をする生徒もいた。床に座って授業を受けることに違和感をあまり感じないように思われる。このとき、世羅先生と小野先生が来られた。子供達に話しかけていただいたり、折り紙の指導をしていただいたので、子供達はたいへん喜んでおり、熱心に折り紙製作をした。手先が器用なのか、速い生徒は10分ぐらいで作品を完成させてかぶっている。授業の後、銀色の折り鶴をくれた女の子がいた。去年作った鶴だろうか、今も大切にさせてもらっている。

13時35分～14時05分、校舎内の案内をMs. Lisa先生にさせていただき、家庭科の授業参観もさせていただいた。小野先生が通訳をしてくださり、世羅先生もいっしょに校舎をまわっていただくことができた。

家庭科室は、奥にキッチンコーナーがあり、入口側半分には、机や椅子、コンピュータが9台あった。家庭科は、週に1回が必修となっており、消費や生活技能を身につける時間である。私が行ったときには、9人の生徒がデスクに着いてビデオで研究をしており、そのあとレポートを書いてまとめるようにしていた。また、別の9人が調理実習をしており、スクランブルエッグを他のどのようなものに置き換えて調理するか考えていた。授業時間が45分間しかなく、簡単なことしかできない。パソコンには、衣食住に合ったソフト「At Ease Items」が入っており、ゲームをしながら、自己判断できるソフト（例：移住の道「オレゴントレイル」）も入っていた。

同じ校舎内の別クラス前に移動した。そこは、問題（行動、情緒障害）があれば他の子といっしょにできない生徒が学んでいる部屋で、現在は9名いる。トイレや手洗いがあり、部屋から出れないようになっているが、週に1回だけMs. Lisa先生の教室に授業を受けに来る。これは、普通教室にもどすためのトレーニングであり、周囲の生徒は関心がないようである。

トレーラーハウスが3つあるが、1つはアカデミックコースの生徒が学び、2つは音楽関係の部屋になっている。

14時15分～15時00分、8th Grade Bandがcafeteriaに全員集まってきた。今日最後の折り紙の授業である。世羅先生と小野先生、近森先生が生徒に話しかけながら、折り紙の指導をしてくださった。Flat Rock Middle Schoolの先生方も集まってきて、いっしょになって折り紙をしてくれている。たくさんの人たちと折り紙ができてうれしい。8th Grade Bandの生徒は、去年、松浦先生が来校したときに折り鶴をつかった生徒たちだった。スクールバスの時間いっぱいまで精一杯折ってくれていた。助け合いながら折っている生徒もいれば、熱心に折り方を聞いてくれる生徒もいて感動した。朝から、忙しく充実した1日となってうれしかった。

3月30日（金）

Flat Rock Middle Schoolを訪問（四日目：最終日）

校長先生にインタビュー

授業参観（理科）と質問

ホームステイ：Yarborough夫妻宅

8時に生徒は教室のデスクに着いている。ちょうど校内放送があり、8時05分には、星条旗に向かって全員が起立し、胸に手を当てて「国家への誓い」をしていた。これは、多くの民族が集まってできた国なので必要である。

8時15分～9時は、Ms. Barker 校長先生のインタビューと友好協定について話し合いを持つことができた。協定に関する話し合いでは、近森先生が通訳をしてくださり、Ms. Barker 校長先生のメッセージをビデオ撮りすることもできた。

Ms. Barker 校長先生は協定を結ぶ意志があり、他の先生方と話し合いをもつということであった。

インタビュー内容は、次のとおりとした。

○ 学校の教育の目標は何か。

- 教員評価 誰がするのか。
どのように評価するのか。
教員の何を評価するのか。
結果をどのように生かすのか。

- 生徒の学習成績評価について
テストの他にどのように学習成果を評価するのか。

9時過ぎから9時40分ぐらいまで、7th Grade Bandの理科の授業（指導者：Ms. Atkins 先生）の参観に行った。細胞分裂を生徒がシュミレーション（人が囲んで細胞膜とし、順番に手を離しながら分かれていく。）していた。この後、生徒から質問を受ける時間を持った。質問内容は次のとおりであった。

- 北灘中学校では、1時間目は何時から始まるか。
- 宗教について授業で教えるか。
- 今回、アメリカの学校で何を学んだか。
- スポーツは何が一番好きか。
- どんな音楽が好きか。
- どんな食べ物が好きか。
- 日本でも英語の授業があるのか。
- 日本とアメリカどちらが好きか。
- 日本の学校では、危険なものを仕掛けられたりすることがあるか。
- 近森先生と私（森）は、どうやって知り合いになったか。
- 日本の中学校ではお祈りをするのか。
- 授業は何時頃に終わるか。
- 中学校1年生から3年生に向かって上がるためのテストはあるのか。
- お子さんはいますか。何歳ですか。
- 学校の成績段階について
- 日本の学校ではコンピュータは教室にあるか。

9時47分～10時55分まで、8th Grade Band（23名、男子11名・女子12名）の教室に行った。Ms. Gillian先生が指導をしており、ここでも多くの質問を受けた。主な質問内容は、次のとおりであった。

- 日本の人口はどれぐらいか。
- 日本に鳥獣保護区はあるか。
- 学校は何時から始まり何時に終わるか。
- 日本の食べ物で好きなものは何か。
- 部活動は何があるか。
- 悪いことをした生徒には、どういう罰を与える

- か。
- 家はどのようなものでできているか。
- 生徒の登下校はどうしているか。
- 制服はあるか。
- 学校では、どんな教科を教えているか。
- 日本の生徒は、自由な時間に何をしているか。
- 日本のお金について
- 中学生の髪のはきはどれぐらいか。
- ウェディングセレモニーの様子は。結婚について。
- 休日はどれぐらいあるか。
- 宿題の数はどれぐらいか。
- 教育漢字は何字ぐらいあるか。
- Amandaを漢字で書いて欲しい。

11時～12時ぐらいまで、8th Grade Band（23名、男子11名・女子12名）の理科の授業（指導者：Ms. Lisa 先生）を近森先生と参観させていただいた。ビデオ（I SNという科学ニュース）を視聴して、環境について話し合いを持つ内容で油流出について考えていた。水資源を身近なものとしてとらえるように、家庭の水道料金について聞いていたが、知らない生徒もいる。井戸水を使用していると答えている生徒もいて、初めて井戸があることを知った。

12時過ぎに以前、日本で働いていたJim Clarkeさんが学校まで迎えに来ており、昼食をしたあと、工場見学に行った。日本語を少し話することができ、日本語での説明をしてもらった。織物工場では、コンピュータ制御の織機が稼働しており、従業員はメキシコから来た移民が多くいた。いつも新しい製品開発をしており、輸出をできるようにしている。

3時になり、Ms. Lisa先生の車で、ホームステイ先のMr. Yarboroughさんとの待合い場所に移動した。初めて顔を合わせた私は、少し緊張していたのか、何か話をしなければいけないと思い話しかけましたが、うまく伝わらなくて困ってしまった。しかし、Yarborough 夫妻は日本へ来たことがあり、話の接点を見つけようと一生懸命になってくれた。この夜は、Laura 夫妻宅におじゃまをして、手作りの夕食を食べることができ、ゆっくりとした時間を過ごすことができた。

3月31日(土)

ホームステイ：Yarborough夫妻宅

Biltmore Estateを観光

メキシコ料理店で食事

店で木工品を見る

モール街で買い物

日本料理を作って食文化について語る

疲れていたのか、朝はぐっすりと眠っており、起きるのが少し遅くなった。今朝も英語がしゃべれない私のために朝食を高木先生、Yarborough夫妻、私の4人で食べれるように気をつけてもらった。食事の時に会話がはずむのは私にとってうれしいことで、この後、4人でBiltmore Estateを観光した。個人の邸宅と敷地としては最大のもので観光客はたくさんいた。見渡す限りの緑に囲まれた敷地とよく整備された庭、邸宅の中は迷路のようになっており、少人数で過ごすには広すぎる空間だった。建物を1周するのに1時間以上かかってしまいましたが、エレベーターもあって、当時の建築の技術を集めた建物であることもわかった。

昼食はメキシコ料理店で食べた。英語に方言があるとは聞いていましたが、この街では「yes」の発音を「ヨッ」と言う人もいるようで、最初は何を言っているのかわからないこともある。メキシコ料理はスパイシーでおいしい。疲れもとれるように感じた。少し小高い丘にある有名な店で木工品を見ることができた。ちょうど5時になっており、品物を購入することはできなかったが手彫りの作品には温もりも感じられた。買い物をするためにモール街に寄ってもらった。日本へ持って帰るものが多くなったのでポストンバックを購入、しかし、壊れたときは修理のために日本から送る必要がありたいへんである。

Yarborough夫妻宅へ帰宅するのが遅くなった。それから高木先生が日本から持ってきた素材を用いて日本料理を作った。Yarborough夫妻、Laura夫妻は日本料理に対する理解を示してくれて、たいへんうれしかった。食事を終えたのは夜0時を過ぎていた。ホームステイ最後の夜ということもあって疲れは感じなかった。

4月1日(日)

ホームステイ(Yarborough夫妻宅)先を出発

滝(Looking Glass Fall)を見学、食事をして別れ

を告げる

自動車でRaleighに移動(車中でサマリーミーティングのための話し合い)、Brown Stone Hotelに到着

夕食はピザ店でボリュームたっぷり

徹夜でSummary Conferenceの準備

朝、7時ぐらいに起床、Yarborough夫妻は、昨夜も遅くまで片づけをしており、今日が最後のホームステイということで、ほとんど眠らなかったようである。州の小鳥であるカーディナルを待ちながら朝食を食べた。餌付け箱を木に取り付けており、昨日の朝に続いて餌を与えてくれたが、カーディナルと会うことはできなかった。アメリカの鳥は羽が単色のものが多くいるようで、見事な赤色をぜひ見たかった。この楽しみは次の機会にとっておきたい。朝食の後、Yarborough夫妻、Laura夫妻、高木先生といっしょに滝(Looking Glass Fall)を見に行った。この滝は、高さと幅がかなりあり水も冷たい。記念写真を撮って引き返すと、もうお昼になっており、6人そろっての昼食を最後にとった。ゆっくりとする時間がなく、テイクアウトにした。Quality Inn parkingでCullowheeとWaynesvilleの先生方と合流した。Yarborough夫妻とも今日が最後となり、お別れとなった。自動車でRaleighに移動し、車中でサマリーミーティングのための話し合いをした。fairな教育ということについていろいろな方向から考えることに決定した。Brown Stone Hotelに到着する時間が短く感じられた。Brown Stone Hotelで今回のGPSメンバー全員と久しぶりに再会した。この日の夕食は、ピザ店でボリュームたっぷりのピザを食べる。このサイズの大きさ驚いた。直径50cmぐらいはあったらどうか、何枚か注文しており、さらに別メニューも注文した。味はととても良く、食がすすんだ。ホテルに帰ってからが忙しかった。あのときは、何ものが初めての体験だったので、Summary Conferenceのための自分の分担について考えるのが精一杯だった。徹夜でSummary Conferenceの準備に全員で取り組み、それぞれが分担を決めてノースカロライナ州の教育について、フェアという観点からまとめをした。私が分担したところは、次の2つである。

(1) 育てたい子供像として

小学校では、基礎学力の充実と、アメリカ国民としての道徳性を身につけるようにしており、「責任」と

「きまりを守る」ことを教育の目標として位置づけている。社会の基本的感覚では、全員の学力向上を目指し、社会的地位の高い職業につかせたいとも思っている。

中学校では、基礎学力を身につけさせることと子供達に経験をさせることで、子供の能力を最大に引き出すようにしている。また、精神的、身体的に健康である子供を育てることや、問題があれば自分で考え、論理的に解決できる力をつけている。他人の権利を尊重しつつ、協調性を持ってコミュニケーションができるようにしている。

高等学校では、想像力の育成に重点が置かれており、その基盤となる学力の育成も重視されている。生徒は卒業後、就職したり進学するなど、進路は様々だが、それぞれが自分の目標を持って授業にのぞむようにしている。そのため、教師は生徒が将来、社会において自立していける力をつけるよう支援している。

(2) 子供の姿の現状について

幼稚園では、readingとwritingを重点としており、小学校へと学年が上がるにつれてグループ学習から一斉学習になっていく。また、パブリックスピーチを取り入れることで、自己表現をする力を育てている。子供は学習に真面目に取り組み、教師の指示によく従っており、校内のルール（規範）をよく守っている。これは、学校の責任と家庭の責任を明確にする考え方も背景にあると思われる。

高等学校では、学校のルールを守らず、無気力な生徒もいたが、ほとんどの生徒は目標をしっかりと持って、それぞれのレベルで学んでいる。放課後は、多くの生徒が目標達成のために自主的な学習を行っている。そのための教師の支援もしっかりとしている。

これらは、各個人のジャーナルをもとにして、Raleighに移動中に車内で話し合いをしてまとめたものであり、討論が白熱したこともあって核心をつく内容に近づいたと思う。各個人が作り上げた発表原稿（日本語文）を英会話文にまとめていただき、パワーポイントのプレゼンテーションが完成したのは、4月2日の早朝で、空が明るくなりかけていた。部屋に帰って身仕度をし、Summary Conferenceに向かった。

4月2日（月）

Summary Conference、昼食会
州議会訪問

Summary Conferenceでは、各地区ごとに発表が行われ、どの発表もアメリカ側の関心が集まっていたように思う。パワーポイントのプレゼンテーションだけでなく、工夫を凝らしたパネルもあり、中には笑いをとりながらの発表をする地区もあって充実した締めくくりとなった。WCU地区訪問のメンバーは、誰もが真剣に日本語で発表した後、高木先生と塩田先生が英訳をして内容の濃い発表ができたと思う。アメリカの教育の良いところだけでなく、素直に感じたことや日本の教育との比較で、これからの教育の課題を述べるなど日本の教育についても見直しができる内容となっている。

昼食会では、ともに夜を明かした鳴門地区の仲間どうしがテーブルにつき、これから日本へ帰ってからの目標についても語り合うことができた。すばらしい一時を過ごすことができうれしく思う。

ノースカロライナ州議会訪問では、上院と下院のしくみや議員の個室を見学したり、議会見学時に議長さんからGPSPのメンバー紹介があるなど、大歓迎を受けた。中央階段の赤色の絨毯の上を歩くことはできなかったが、緊張感漂う雰囲気の中での訪問は、一生の思い出となった。

4月3日（火）

Exploris Museum とExploris Middle Schoolを訪問
昼食はイタリア料理のレストラン
North Carolina Science Museumを訪問
州教育委員会訪問
モール街でショッピングとdinner（全員）
Mr. Don Spence先生の部屋を訪問

Exploris Middle Schoolは、州の学校から選抜で来た生徒が学んでおり、多くの視察を受けているようで、生徒の案内もたいへんよかった。この学校では、詳細なスケジュールがあり、すべての生徒がこのスケジュールをこなしている。テーマ学習が毎日行われており、生徒がテーマを自分で決めて行う。グローバルアートの中では、たとえば芸術、体育、外国語（スペイン語、フランス語）の中から、どれか選ぶようにしている。フライムグループという授業では、10人の生徒がいて自分で1週間の目標を立てて、目標が達成できたかどうかを確認するそうである。評価は、ポートフォリオ

などを使って家庭との連絡をとるようにしている。8年生は、ボストンへ旅行に出かけておりいなかったの
で、6年生と7年生を見学させてもらった。壁には生徒作品がたくさん展示されており、切り絵で世界地図をつくったり、ホロコーストに関する作品を仕上げた。体育館は少し狭いような感じを受けたが、ペットボトルをピンにして、ボールを転がし倒していた。

Exploris Museumを訪問。ここが Exploris Middle Schoolの生徒の学習の場と聞いて驚いた。世界的な資料がそろっており、中学校で学習するあらゆる内容のものを深めることができると思った。担当の先生から説明があった。この施設には、ティーチャーリソースセンターがあり、1979年にこの構想ができて1999年の秋にできたそうである。世界の文化を中心にした博物館であり、世界とどのようにかかわるか、地理的なことだけでなく、人口も含めて研究をしている。引き続いて Exploris Middle Schoolの生徒が案内と説明をしてくれた。民族の伝統について触れたり、アンネフランクのコーナーでは、彼女が住んだ家の模型や当時の状況がよくわかるようになっていた。環境に関係したコーナーでは水の浄化方法や資源の再利用について実物を展示して具体的にわかるような仕組みとなっていた。1階の土産売り場では、展示品に関係したものが多くあり、各国のお土産が置かれていたり、Exploris Museumを示すものなど工夫もされていた。

昼食は、イタリア料理のレストランでスパゲティを食べた。その通りは大通りの近くにあり街並みは落ち着いた雰囲気であった。午後からは、North Carolina Science Museumを訪問した。自然史博物館として、植物や動物の種類と特徴についてわかりやすい説明がされている。現在の生物だけでなく、中世代三畳紀、白亜紀、ジュラ紀の恐竜の化石についても展示しており、地球の歴史と生物の進化を関連づけていた。

州教育委員会では、州教育のための教師用文献の購入をした。州の学校のうち学校平面図を集めてあるカラー板冊子も入手し、日本の学校の校舎との設計の違いや、学校独自の教育の方法についても研究をしていきたいと考えている。

ホテルに荷物を置いて、モール街にショッピングに出かけた。ホームステイのときに別のモール街に一度行っているのに雰囲気はわかっていたが、ショッピングしたいものを捜すのに時間がかかってしまい、すべ

ての店をまわることはできなかった。この後、日本料理の店「歓喜」で全員がそろってdinnerを食べた。ノースカロライナ州へ来て初めて食事に寄った店と料理メニューが似ていることもあり、今度は、メニュー選びに楽しみがあった。パフォーマンスで料理をする手さばきが見事なところは、見応え十分であった。ホテルに帰ってからWCU地区のメンバー全員がDon Spence先生の部屋を訪問して最後のひとときを過ごした。

4月4日(水)

Raleigh空港から関西国際空港へ

朝、ホテルの出発時刻が10分ほど早まり、部屋でゆっくりとしていた私を、最終の車でRaleigh空港まで送ってくださり恐縮した。空港までの移動の途中、見える景色は、なつかしく、もう少し長く滞在したいと思った。昨日より、ホームステイでお世話になった Yarborough 夫妻やMs. Laura先生とも別れ、寂しさを感じる。

Raleigh 空港の出国ゲートでは忙しかった。スーツケースの中には、本がたくさん入っており、重量制限を越えはしないかと不安だったが、スムーズにいった。North Carolinaを去ることは残念だったが、日本に帰ることで今回の研修(2週間)がさらに充実したと感じると思った。飛行機の中では、新たな目標を決めて帰りの旅路に着いた。

4月5日(木)

帰国

飛行機が日本に到着した時、久しぶりの日本に胸が躍り、長いようで短かった今回の研修をすぐに思い出した。今回のアメリカ研修が、単なる思い出とならないようにするために、これから、Flat Rock Middle Schoolやホームステイでお世話になった Anne先生や Yarborough 夫妻との連絡を密にとっていきたいと思う。私にとって、今回、出会った人たちは皆が優しく気を遣ってくれたし、温かく迎えてくださった。それだけに忘れることのできない2週間であり、もう一度、ノースカロライナ州WCU地区を訪れたい。

最後に、今回のグローバルパートナーシッププロジェクトに参加させていただいたときにお世話になった先生方には、たいへん感謝しております。紙面をかりてお礼を申し上げます。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究報告書

—日米の高校における学校教育の実際と課題—

鳴門市立鳴門工業高校 教諭 塩田 あかり

(1) はじめに

日本の教育とアメリカの教育の比較を通して、日米双方の教育における問題点を見だし、今後の教育に生かしていきたいと考え課題を設定した。

- ①日本では高校間の学校間格差が存在し、多くの不本意入学者が生み出されているという現状であるがアメリカではどうであるのか。
- ②クラスの規模の縮小が叫ばれているが、アメリカではどうであるのか。
- ③クラスの規模と関連し、能力が異なる生徒に対してどのような配慮や工夫がなされているのか。

主に以上のような観点から、日米の高校における学校教育の実際と課題を探って行きたい。

(2) 研究の概要

① 学校間格差について

本校は工業高校であり、卒業後の進路としては、就職者約6割、大学・専門学校への進学者が約4割である。工業高校で専門的な知識を身につけ、それを生かして就職したいと考え入学してくる生徒がいる一方、不本意入学という形で入学してくる生徒もいる。2学年より機械、環境、情報の3コースに分かれ、実習を中心に専門教科についての学習を深めている。もちろん英語等の普通教科の単位も修得しなければならないが、中学時代に学習につまずき、強い苦手意識を持っている生徒も多い。そのため劣等感を持っている生徒も多く学校生活に目的を見出せず、無気力になりがちである。

アメリカの高校が日本の高校と大きく異なっている点としては、地域の生徒が全てひとつの高校に進学しているということがあげられる。高校による生徒のランクづけ、不本意入学という言葉は存在しない。養護学校、工業高校、商業高校、農業高校、普通科高校が全て一つの学校にまとめられている。その中で、必須科目とそれぞれの進路に応じた選択科目を履修していく。生徒を同じスタートラインに立たせるということに重点を置いているように思われる。私は、タスコラ

高校とチェロキー高校にそれぞれ2日ずつ訪問したのだが、タスコラ高校での校長先生の教育方針は、生徒一人一人に自分の目標を持たせること、そして創造性を発展させることであった。卒業後、進学する生徒、就職する生徒、結婚する生徒など進路は様々であるが、一人一人が自分に自信を持つことができる教育が行われているように感じた。

日本でも中高一貫教育、小学区制が叫ばれているが、実際には様々な問題がある。小学校・中学校の段階で学習につまずいてしまった生徒の中には、極度な劣等感を持っているものもいる。30名～40名を対象とした一斉授業では、標準レベルの生徒に焦点を合わせた授業を行わざるを得ず、一度つまづいてしまうと、それを修復できないままになってしまう。さらに高校による生徒のランク付けにより、さらに追い打ちをかけてしまっているのが現状である。これは日本の教育の大きな課題である。

② クラスの規模について

アメリカにはホームルームというものがない。①で述べたように生徒は必須科目に加えそれぞれの進路に応じて各自で選択科目を履修していく。もちろん40名といった大規模なクラスは存在しない。また、教師はそれぞれの教室を持っており、生徒がそれぞれの教室に移動していく。英文学の授業を担当している先生の教室には、シェイクスピアの作品で登場人物が身にまとっている衣装が復元され、飾られていたり、お城の模型が飾られていたりする。ほとんどの教室にビデオやOHPがあり、教育機器も充実している。またほとんどの教室にアメリカの国旗が掲げられている。アメリカ国民としての自覚を促し、アメリカ国民としての道徳性、責任感、規則を守ることを重視している教育方針に通じているように感じられる。このような環境のもと、カリキュラムや学習方法において、スモールステップや小集団学習などの工夫が見られる。また必須科目の中でも、レベルに応じたクラス分けが行われているというのは最も注目すべき点である。日本でも、習熟度別クラスを取り入れている高校も増えてきてい

るが、まだまだ十分であるとは言えない。訪問先のチェロキー高校で、私がしきりに、クラスの数が多いことが日本の教育に様々な問題をもたらしており、日本も少人数制を取り入れるべきであると言っていたところ、ある先生から、では教育においてクラスの数だけが重要なのか、と質問された。教師は俳優でもあり、生徒を引きつける演技をしなければならず、どんな状況でも授業にベストを尽くすことが教師のつとめであると言われた。もっともな意見である。しかし、教科によっては、単元の積み重ねが必要とされる教科もあり、小集団学習が必要であると思われる。

③ 能力が異なる生徒への配慮や工夫について

①、②を通して述べてきたように、アメリカでは同じ地域の生徒は全て、同じ地域の学校に通う。養護学校、職業高校、普通科高校が統合されている。ここに、子供を同じスタートラインに立たせるという考えを重視する教育方針を見ることができる。これは子供の教育を受ける権利を守ることにもつながっていく。例えば、障害を持つ生徒も同じ学校で学んでおり、他のコースの生徒がボランティアで授業の補助に来ている。社会に出る前の準備段階として、学業のみならず人としての生き方のようなものも学んでいるように思われる。②で述べたように、アメリカの高校にはホームルームがない。日本ではホームルームが学校という社会に

おける家庭の役割を果たしているように思う。ホームルーム担任が学校における親の役目を果たしている。このホームルームがうまく機能すれば、ホームルームの存在にも意義を見いだすことができる。しかし学級王国という言葉に象徴されるように、ホームルームには問題点も含まれている。生徒の問題行動が発覚した場合、ホームルーム担任が責任を問われるという極端なケースも見られる。一方アメリカではホームルーム担任がいないということで、すべての教員が生徒の教育により深く関わっているように思われる。学校におけるしつけには、一貫したものが感じられ、職員間の共通理解のもとに教育が行われているようである。

アメリカといえば自由な国というイメージを持っていたが、規則はしっかりとしており一人一人に自分のやるべきことをわきまえさせる教育が行われている。日本では不本意入学という言葉から始まり、高校による生徒のランク付け等の様々な問題点が存在し、その結果、投げやりになってしまったり、学校生活に目標を見いだせない生徒を生み出してしまっている。その点では、アメリカでは一人一人の教育を受ける権利が十分に保証されているようである。また教員は授業にのみ専念できる環境が整えられている。事務的な仕事は主に担当の職員により行われているのである。

④ 研修の日程

日 時	場 所	内 容	関 係 者
3/24 (土)	Charlotte Airport Madison Hall	現地到着	
3/25 (日)	Harrel Center Auditorium, Junaluska Assembly	歓迎レセプション	
3/26 (月)	Fairview Elementary School Smoky Mountain High	各授業参観、質疑応答	
3/27 (火)	Tuscola High School	各授業参観、質疑応答 授業についての打ち合わせ	
3/28 (水)	Cherokee High School	各授業参観、質疑応答 授業についての打ち合わせ	
3/29 (木)	Cherokee High School	各授業参観、質疑応答 鳴門工業高校、日本文化の紹介、職員会議への参加、校長先生との対話	
3/30 (金)	Tuscola High School	各授業参観、質疑応答 鳴門工業高校、日本文化の紹介、職員会議への参加、校長先生との対話	
3/31 (土)		ホームステイ	

4/1 (日)		ホームステイ	
4/2 (月)	Brownstone Hotel	Summary Conference	
4/3 (火)	Exploris Museum Exploris Middle School	各授業参観、質疑応答	

以上がごく簡単な研修日程の一覧である。3月27日より30日までの4日間は一人でタスコラ高校とチェロキー高校の二校を訪問した。当初の目標では、「俳句について」というテーマで授業をする予定であった。しかしそれぞれ2日ずつの訪問であり、ほぼ1日は学校を案内していただいたり、校長先生に話を聞かせていただいたりという日程で終了し実際に授業が出来たのは1日だけであり、とても俳句について語るまではいかなかった。校長先生の対話においては、それぞれの学校の教育方針、また教員の評価基準などについて聞くことができた。最終日に訪問したエクスプロリス・ミドル・スクールにおいては、生徒一人一人に自らの学習目標を立てさせ、さらにその目標の達成度合いを自己評価するという教育が行われている。これは教育の原点であるように思われる。生徒一人一人によって能力も異なり、興味、関心も異なっている。その能力や興味、関心をいかにして引き出すかが教師の役目である。ただ、上で述べたように、日本では背景に様々な問題が存在し、難しいところがある。

(3) 研究の結果と考察

日本の教育とアメリカの教育を比較を通して、日米双方の教育の問題点を見だし、今後の教育に生かすというのが研修の大きなテーマであった。さらには、アメリカの高校との共同研究という課題があったのであるが、比較的大規模であり、学校内の組織も細分化されているという高校の校種の特性上、単発的な訪問に終わってしまったように思われる。しかし、前者の研修テーマにおいては、特に、日本の教育とアメリカの教育の比較を通して、日本の教育における様々な問題点を見出すことができた。

第一点としては、ノースカロライナでは、生徒を同じスタートラインに立たせるということに重点が置かれている。同じ地区の生徒は全て同じ高校に通うのである。これは生徒一人一人の教育を受ける権利を保証するということにもつながっている。というのも日本では、職業高校と普通科高校が分かれており、それが

高校のランク付けにつながるという傾向がある。このことが、生徒に劣等感を与えたり目的を失わせたりという悪影響を及ぼしている場合がある。クラスの授業においても、ノースカロライナでは少人数制をとっており、さらにレベルに応じた学習が進められている。一人一人に目標を持たせる教育が進められているのである。日本の高校においても少人数化が求められる。

第二点としては、ノースカロライナでは、教員の地位確立のために、研修制度や専任教師の配置などが充実しているという点である。また、教師の評価基準もしっかりと確立している。

第三点としては、日本に比べて、教育機器、教室環境が充実しているという点である。これはそれぞれの教師が自分の教室を持っているということに依る。

実際にはわずか4日間という短期間の訪問であったため、ノースカロライナの高校のわずか一面を見たにすぎないのかもしれない。しかし、個々の教育を受ける権利は日本に比べて保証されているように感じた。

(4) おわりに

(3)でも述べたように、ノースカロライナの高校との共同研究という点では非常に難しく、思うような成果は挙げられていない。しかし、今回の訪問において訪問した高校の様子を、自らの授業で生徒に伝えたり、また本校教員に伝えていくことから始まると思う。さらに、学校規模の交流は難しくても、パートナーの先生との交流を続けていく努力は怠ってはならない。また、日米の高校を比較していく中で、さらに日本の教育について考えていかねばならない。訪問したチェロキー高校では、日本の同和問題について説明してほしいと求められた。

アメリカといえば自由奔放な国というイメージを持つが、アメリカの高校では、開放的な雰囲気の中にも規律を守り、自分の行動に責任を持たせるためのしつけがしっかりと行われていた。これは日々の教育において見習わねばならない点である。このようにこの研修において学んだことを、実践していきたい。

国際理解教育の推進に向けて

—タスコラ高校、チェロキー高校の訪問を通して—

鳴門市立鳴門工業高校 教諭 塩田 あかり

(1) はじめに

本校では2学年より機械、環境、情報の3コースに分かれて、実習などを中心にそれぞれの専門分野について学習している。一方で、英語などの普通教科の単位も当然修得しなければならないが、中学時代に学習につまずき、強い苦手意識を持っている生徒も多く、いかにして生徒に英語の学習に興味を持たせるかが大きな問題となっている。就職希望者が多いため、受験英語に重点を置いた指導はあまり効果をもたない。逆に進度に縛られず、余裕を持って授業を進められると言う点で、今回の研修をうまく授業に取り入れることができればと思い、「国際理解教育の推進に向けて」という研修テーマを設定した。

(2) 国際理解教育の推進に向けて

「日本人だから日本語が話せれば十分」という極端な考えをもつ生徒を含め、英語の学習の必要性を感じていない生徒が多く、英語は言葉でありコミュニケーションの重要な手段であるということを認識させることが大切であると考えた。最終的には手紙や電子メールのやりとりができるようになれば、生徒の英語学習に対する意欲が向上していくことが期待できるのではないだろうか。

(3) 訪問に向けての事前準備

昨年度本校への訪問はなく、パートナーともうまく連絡がつかない状況で、パートナーとの事前の話し合い（メールのやりとり）が不十分であったが、個人としては上で述べたように、生徒間の交流を進めていくきっかけを作るということを最終的な目標として、研修に臨んだ。また、両校で授業をさせてもらえるということで、俳句の紹介を授業のテーマとした。本校の生徒が日本語で作成した俳句を英訳したものを紹介し、実際にアメリカの高校生にも英語で俳句を作ってもらおうと考えた。

本校では、英語Ⅰが1学年と2学年の2年間必須科目、オーラルコミュニケーションAが3学年での必須

科目、英語Ⅱは2学年、3学年での選択科目となっており、この選択の授業では、10名程度で授業を行っている。クラス全体で行う必須科目に比べて生徒一人一人とのコミュニケーションもとりやすいため、このクラスを利用してアメリカの高校生に対して抱いているイメージや、アメリカの高校生に質問してみたいことなどの調査を行った。俳句の作成に関しても同様である。

(4) 研修の内容

4日間のうち1日目・4日目はタスコラ高校を訪問し、2日目・3日目はチェロキー高校を訪問した。それぞれ2日ずつの訪問ということで実際に授業が出来たのは各校1日ずつであり、実際にアメリカの高校生にも俳句を作ってもらおうという段階までは進めなかった。本校の学校紹介のビデオを作成し、それに基づき本校の紹介をし、同時に日本文化についての紹介も行った。この時点で、アメリカの高校生から様々な質問が出された。日本の高校生は休日をどのように過ごしているのか、日本の高校ではどのようなクラブがあるのか、日本の高校ではどのようなことをすると謹慎になるのか、日本の高校生も洋画を見たり、洋楽を聴いたりするのかなどである。この質問は事前に調査した本校生徒から出された質問と共通している。

(5) 今後の交流計画と課題

本校では教員数が約70名ほどであり、工業高校ということで、カリキュラムも複雑になっている。全教科を通しての国際理解教育の実践が望まれるが、あまりにも漠然としている。そこで、まずは自分が担当している授業で実践していきたい。アメリカでの授業風景や学校の様子を収めたビデオを生徒に見せ、アメリカでは普通科高校、工業高校、商業高校などの区別がなく、地域の生徒が全てひとつの高校に集まっていること、ホームルームがなく、自分の進路希望に応じて授業を選択するシステムが取り入れられていることなどを説明した。また授業で実際に建築している様子には

かなり興味を示していた。現在、ALTとのチームティーチングの授業で、ALTに短いメッセージを書き、実際にALTからの返事を受け取るという内容の授業も取り入れたりしている。これを実際にアメリカの高校生と行うことができればと考えた。私が訪れた2校のうち、チェロキー高校では、1クラス平均7名程度で授業を行っており、日本に戻ってから、私が担当しているクラスの生徒とメールのやりとりをしてほしいとパートナーの先生にお願いをした。本校には情報科があるため、パソコンの台数もそろっている。

まずは、自己紹介からということで、英語Ⅱの授業を選択している20名が、ひとりずつ簡単な自己紹介の文を作成した。これをまずパートナーの先生に送り、授業で紹介してもらうことにした。しかし、日本に戻っ

て来てから、パートナーの先生とうまく連絡がとれなくなり、また定期考査や球技大会などの学校行事と重なり、うまく進んでいないのが現状である。高校の場合、学校全体の規模が大きくなるため、学校単位の交流というのが難しくなりがちである。学校単位の交流が難しいとなると、パートナーの先生との個々の交流が重要になってくるのだが、単発的な訪問で終わってしまいかねない。いかにして、学校単位での交流を図るか、また交流を継続させていくかが、大きな課題である。アメリカの高校の様子や、アメリカの高校と日本の高校で大きく異なっている点などを生徒に伝えることが出来たのは、大きなプラスになったと思うが、その後の交流にまでつなげて行って初めて、国際理解教育という言葉が生きてくるのではないかと思う。